

# 開学四十周年記念号によせて

人文学会会長 門 田 明

「人文」創刊号の巻頭言で、当時の虎頭民雄学長は、「重き荷を負いて遠き道を行くが如し」という、人生を喩えた徳川家康の言葉をひいて、研究論文の発表というのは、学究の遠い旅路での「重い荷の点検」であり、「不要な荷は捨て、新たな荷を加えて、また限りなき前進をつづけて行かなければならない」と言っておられる。この創刊号刊行の日付は1977年12月1日であるから、「人文」もやがて発刊以来13年を迎えることになる。人間でいえばティーン・エイジに足を踏み入れようとする、人生で最もはつらつとした年頃にさしかかったといえる。

いま開学記念号を出す機会に創刊の頃を振り返ってみると、当時若い研究者の間に論文執筆の意欲が旺盛で、なかには発表機関誌が足りず、「紀要」以外に地域研究所の「くろしお」に論文を掲載するようなこともあった。このような経緯から、商経学会の「商経論叢」に対して、人文科学関係の教員による人文学会が結成され、研究誌「人文」が出されることとなった。創刊号の編集後記を見ると、8月1日原稿締め切りで、5編の原稿すべてが、期日を待たず提出されたところがある。さらに驚くことは、「タイプを専門家にお願いした以外はすべてわれわれの手造り」とあり、若い会員が印刷・製本の労を進んで提供した事情が書かれている。そう言われてみると、当時の人文学会には、なにかムンムンする熱気のようなものがたちこめていたのを思い出すのである。

すでに「紀要」があり、地域研究所の「年報」があり、先輩格の「商経論叢」があり、「人文」の独自性は何か、いささか気負うところもあったろう。「人文」の二字は福井迪子先生が藤原行成の筆跡を「白楽天詩巻」後嵯峨院本から選ばれた。この題字の出典の記載が第13巻に見られないのは残念である。いまひとつ「人文」には本学教員以外の会員の投稿を認めた時期がある。第3号の『花鏡』の性格——故観世寿夫先生に」などはその例で、著者の栗沢道代さんは女専国文二回生である。この旧姓山下道代さんは、その後筑摩書房から『古今集恋の歌』を出され、奥村恒哉先生が南日本新聞の「一冊の本」の中で、「古今集を古今集として読むという至難の技をなしとげた」と紹介された。

短期大学を管理運営することも、学会を続けて行くことも、機関誌を毎年出版することも、考えてみれば、どれも等しく「重き荷を負いて遠き道を行くが如し」という思いがする。ただ、昨日のとおり今日も繰り返すのであれば、機械や牛馬も変わらない。開学40周年を機に「人文」にも新しい生命を吹き込みたいものと思う。